るものがないので確定されぬが、曾て平壤驛構内で發掘された東晉永和九年の在銘塼墳との比較から、或は五銖錢・大泉五十等の錢貨の出土などから東晉初期を降るものではない。以上簡略な內容の紹介であるが猶附錄として今村黑田國房野村諸氏の人骨血精その他化學的な調査の結果が揭げられて居る。圖版九十九枚。卷末に英文の要項を載せて居る。（菊倍版・朝鮮古蹟研究會發行、九十部限、京都夷川寺町文星堂發賣、定價貳拾五圓）

○景印舊鈔本史記孝景本紀第十一

本書は京大文學部創設三十周年の記念出版として舊久原文庫藏史記孝景本記を景印した卷子本である。我が國に於ける史記の古鈔本であつて、その書寫年代の平安朝に屬するものとして今日までに知られて居る限に於ては二種の系統の本がある。卽ち一は高山寺・岩崎文庫所藏の世に所謂高山寺本と稱されて居るものと、これより更に舊いものとして知られて居る毛利公爵家藏・東北帝國大學藏及び本書の原本の三本、所謂卜部本の系統のものとである。毛利公爵家藏本は呂后本紀第九であり、東北帝大本は孝文本紀第十であり、これは孝景本紀第十一であつて、これ等は卷次に脈絡があり、且つ體裁及び識語等により、嘗て同一人の書寫になり、今日に殘存した殘卷であることは何等の疑問も挾まれない。今度景印出版に際し、那波助教授の精緻なる解說が附されて居るが、それに據つて本書の性質價値等を明かに窺ふことが出來る。これによればその書寫年代は今より約八百六十餘年前、平安朝中期、後三條天皇の延久五年で、その筆者は當時漢學の名家として知られて居た大江家の一門である大江家國である。猶本書の內容に就て、これを汲古閣十七史本百衲本史記等と比較校勘すると傳寫の間に於ける誤りも若干發見されるが、然しその或る部分に於ける文句の異同に於ては司馬遷の原著に更に近いものではあるまいかと想はれるものがある。注意すべき點は孝文帝の長公主嫖の子嬌を隆慮侯に封じたこと、及び中三年冬（BC 185）に諸侯の御史及び御史中丞の官を罷めた記事とである。此の他解說には吉澤教授指導の下に藤枝德三氏の調査した乎古止點並びに假名が附載されて居る。（京大文學部發行　定價五圓五拾錢）〔以上小野〕

○東洋史研究

東洋史研究會刊

京大東洋史學科の卒業生を中心とする東洋史研究會の結集が成つたのは一昨年初頭のことであつたが、其後同會の健やかな發展と共に遂に機熟して、本年十月雜誌「東洋史研究」を創刊し、十二月には續いて其の第二號を刊行した。最初その創刊にあたつて、本誌の趣旨とする所を揭げなかつた爲に、兎角の批評もあつた樣だが、要するに本誌は、東洋史學の整理淸掃によつて、その進む可き分野を明確ならしむることを標榜し、其の目的のため東洋史學に於ける論著の批判及び紹介に最も重きを置くものであることを、その編纂體例の實際によつて示し、又較々遲蒔き乍ら、第二號の編輯後記によつて明言した。かういふ主意の下に出發した雜誌は、史學關係のものゝ中にあつては稀れであり、殊に東洋史學

專門のものとしては、恐らく本誌を以てその嚆矢とするであらうが、實は今日の學界狀勢から見れば、この種のものがもつと早く誕生してもよかつた筈である。今迄にも較々性質類似のものとして年鑑式のものが無かつたではないが、本誌の如く、たえず學界の批判と動向とに正確な眼を向け、而も一方淩渫たる著論の發表誌たらんことを企圖したものはない。

內容に就いて一瞥すれば、創刊號に於ける森氏の卷頭論文「晉、趙の北方進展と山川の祭祀」を始め、第二號所載の宇都宮氏「漢代蒼頭考」、三田村氏「天命建元の年次に就いて」等の諸論文は何れも今日東洋史學界の問題たる可きものを取り上げて居り、山本、內藤兩氏の飜譯連載物中、前者の「聖成吉思汗の家譜」は該書が蒙古史研究上色々の意味に於いて珍重せられてゐる折から、洵に尠なからぬ注意を惹き、後者の「最近五十年支那學界の回顧」に至つては最も本誌の眼目とする所に、適合する記事とせられよう。批評紹介及び彙報類の占むる頁が、遙かに雜誌總頁の半以上に及んでゐることこそ、本誌の特異とする點であらうが、それが何れも趣旨に聲明した通り、甚だ眞面目で充實した力を感ぜしめるものであることが喜ばしい。頁數に制限され、論著の批評紹介されたもの、未だ充分であるとは言はれないけれども、今後益々この點に重きを置いて一意邁進、折角その趣旨とする所の顯揚に努力されれ度い。

尙羽田博士は終始本誌の監修的地位に立つて、助力と助言とを惜まれない。本誌の生新にして而も堅實な持味は一つに博士の學風に負ふものとせられよう。（隔月年六回、京大東洋史研究室內東洋史研究會發行、誌代一部五拾錢、一年參圓）

○朝鮮金石考

葛城末治著

本書の朝鮮金石學に於ける地位と使命とに就いては、本書自序の一節に「抑々朝鮮の金石に就いては既に先人先輩の研究を經たものもあるが、未だ研鑽の初程に在つて、向後學者の討究に俟つ可きものが頗る蕃く、且つ近年以來新出土の金石は夥しい數に達する。然も從來研究せられたものゝ多くは拓本を切截貼付し、是れに碑目を揭げ、撰・書人。堅碑の年月日を記し、或は之を品隲し、若くは箇々の金石に關する特殊の攷證研究に係れるものであつて、未だ朝鮮金石學の全豹には論及せられてゐない。そこで予は自ら揣らず淺識を以て、聊か朝鮮の金石に念を效すこと多年、稍や系統的の研究を試みたものが本書である云々」とある文言を推せば、蓋し明確にして更に付言すべきものはないであらう。

七百數十頁に餘る本大册は嘗て著者の世に問はれたる舊稿並びに未發表の數篇に、若干の改訂を加へて成り、之を概說篇、各說篇及び研究篇の三篇に分たれた。

先づ概說篇に於ては一般金石文の意義、淵源より說き起して朝鮮金石學總說に入り、朝鮮金石文中の集字碑、吏讀、避諱と缺筆、建號、漢字以外の金石文字等朝鮮金石文に特有な事象に就き、最も含蓄多分にして而も懇切平明な解說を試みられた。

各說篇は朝鮮金石文の選釋である。之を樂浪郡及び三國時代、

新羅統一時代、高麗時代前期及び後期の四段に分ち、朝鮮の著名なる金石一百を選んで收載し、之に就いて一々所在、形狀、解釋、撰、書人年代の考證等を詳細に說述されたものである。必要なる個所には、夫々適宜なる寫眞版を挿入して理解に便し、又最も多とすべきは一金石毎に、その參考文獻を仔細に附記して示されたことである。假令ひ少許の遺漏はあるにしても、讀者に與ふる便益之より大なるはない。この學及び學界に對して敬虔忠實な著者の態度は、本書一卷を通じて流れる所であり、徒らな獨說獨斷を避けて、常に學界の業績の集成と、その冷靜嚴格なる批判とを以て終始せらるゝ重篤な學風は洵に悅ばしいものである。本選釋篇中、李氏朝鮮の金石文研究に及ぶものなきは若干物足らない感がないでもないけれ共、著者は別にその研究の用意ある旨を付言してゐられる。

最後に「寶林寺毗盧舍那佛に就いて」以下十篇の研究論文を收めて研究篇を樹てられた。「新羅葛文王に就いて」「栖歲より觀たる上代の日鮮關係」等は必ずしも金石に關した論究とは言ひ難いけれども、その獨自にして又興味深い見解は却つて特に注目せらるるものではあるまいか。前者は故今西博士の說を正して學界已に定評あるもの、後者は萬葉集中難解とされてゐた三伏一向、一伏三起等の語を朝鮮の栖歲によつて明解された興趣深い一篇である。

尙卷末には索引を附するの用意を怠らず、要するに朝鮮金石學を最初に集大成せられた本書は飽まで讀者に丁寧親切である。著者はさきに朝鮮金石總覽・同補遺の編纂に當つて最も力を效した一人であると聞く、宛も本書は前書の姉妹篇とも言ふ可きもの、更にこの同じき著者によつて、朝鮮總金石釋解の完成される日あるを期待して已まない。（菊七三四頁、圖版廿九葉・昭和十年八月、京城大阪屋號書店發行、定價五圓）〔以上今西〕

○Arminio Janner; Individualismus und Religiosität in der Renaissance.

ブルクハルトがルネサンスを中世と對立せしめ、靜的史觀に立つてルネサンスの本質を把握せんとしたのに對し、歷史の連續性を重ずる立場よりルネサンスの開始を中世へと遡らしめる所謂"Wurzelzieher der Renaissance"が現はれ、それ等の人々によつてルネサンスに於ける中世的要素が重要視されると共にその宗教性が問題となつたことは既に周知のことである。しかしながらかかるルネサンスの起源探究及び宗教性の問題は主として獨逸學界に於て提出せられ論議せられてゐたが、これに對するイタリヤ學界の見解についても一應注意を拂はねばならないのであつて、本論文はそのルネサンスに對するイタリヤの研究角度を紹介せる點に我々の興味を引くのである。筆者はイタリヤに於ては獨逸學界に於て Eppelsheimer が力說せる論點は自明であり、イタリヤの研究角度は單純にして非問題的で Burckhardt, De Sanctis の立場を確保してゐると述べてゐる。以下その論旨のみを紹介するに止める。

Thode, Gebhardt, Sabatier, Courajod 等のルネサンス起源の研